

## 〈近代〉——記憶装置の誕生

はじめに

〈近代〉という概念はきわめて曖昧である。そして〈近代〉を論じることが、その概念を厳密に規定する態度を、あらかじめ放棄するところからはじまる、といってもよいほどである。これは〈近代〉なるものが、数直線上に刻み込まれた単なる時代区分ではなく、その前後の時代を分け隔てるような濃密な出来事の連鎖が、凝縮された空間であることに起因するのだろう。この濃密さゆえに、〈近代〉の「腑分け」は困難をきわめ、前後の時代とは「なにかが違う」という、明確には言語化されえない漠然とした感覚だけが、〈近代〉という概念を規定してきたようにもみえる。

筆者は、以前、『記憶術のススメ——近代日本と立身出世』<sup>1</sup>において、明治二十年代を中心とした記憶術の大流行という現象を通し

て、〈近代〉の一面を描こうとした。そこでは十分に展開できなかったが、記憶術の登場は、〈近代〉なる時代のシステムを象徴していたといえる。つまり、意識的であれ無意識的であれ、さまざまな分野で記憶術の原理が活用され、モノや制度の体系においても、記憶術の実践を容易にするような道具立てが誕生した。その意味で、〈近代〉はひとつの〈記憶装置〉の誕生であったともいえる。

そこで本稿では、〈近代〉を、それまでの時代とは異なったタイプの〈記憶装置〉が誕生した時代として描いてみたい。時代としては、明治二十年代を中心とする明治時代をおもな対象とする。また、ここでいう〈記憶装置〉とは、「人々がものごとを記憶したり想起したりする様式や身体実践を方向づけるようなシステム」である。いうまでもなく、それぞれの時代には、それぞれの〈記憶装置〉があったはずである。ここで問題となるのは、その〈近代〉的特徴で

岩井 洋

ある。したがって本稿は、〈記憶装置〉の〈近代〉性を描きだす、「記憶の社会学」あるいは「記憶の歴史社会学」の試みである。<sup>(2)</sup>

### 一、記憶の社会学——その視点と学問的背景

本題にはいる前に、まず「記憶の社会学」の学問的背景と、その視点について簡単にふれておきたい。

一九八〇年代後半から、「記憶」というテーマは、心理学、社会学、人類学、歴史学をはじめとする諸分野が交差する重要な結節点となってきた。この背景には、おおむね以下のような三つの動きがあると考えられる。

(一) グローバリゼーションと国民国家の揺らぎ。

(二) 戦後五十年を契機とする歴史的回顧。

(三) 記憶観の変容。

「グローバルゼーション」(globalization)は、とりわけ一九八〇年代以降、社会科学において重要な概念として浮上してきた。<sup>(3)</sup>この概念は、さまざまな国や地域がますます相互依存的になり、世界がひとつの場を形成するようになることをさすが、それは単純な文化の均質化や同質化を意味しない。むしろ、経済や情報のポータル化によってもたらされる、地域文化や民族文化の特殊性・独自性の希薄化に対する、地域主義・民族主義運動などの個別化・特殊化への動き<sup>(4)</sup>と、均質化・同質化への動きが同時に進行していると考えたほ

うがよい。このような流れのなかで、国民国家の枠組み自体が揺らぎはじめ、国家的アイデンティティの再確認と社会的統合をめざす動きがみられ、そこでは、国家や民族に共通の過去が想起されたりしばしば「発明」あるいは「捏造」される傾向がある。<sup>(5)</sup>そこで、「記憶」という問題が浮上する。<sup>(6)</sup>

第二の戦後五十年を契機とする歴史的回顧については、ホロコーストや南京大虐殺はなかったとする「歴史修正主義」の台頭や、ホロコーストをあつかった映画『ショーア』(クロード・ランズマン監督)の公開などによって、戦争での出来事やその記憶に関する議論が活発化したといえる。<sup>(7)</sup>ただし、戦後五十年というひとつの区切りとは別に、五十年という時間が、人間の記憶に対してもつ意味についても考えておく必要がある。

柳田國男は、その自叙伝『故郷七十年』の冒頭で、「故郷というものは、五十年が行きどまりだ、とかねがね私は思っていた」と語っている。野家啓一は、この「故郷」という言葉を「歴史的記憶」と読みかえてこういう。「歴史的出来事の日撃者に許された生存余命はほぼ五十年だということである。だとすれば、『戦後五十年』をめぐる昨今の回顧的行事は、歴史的記憶の臨界点に隣接していることを、改めて自覚しなければならぬであろう。<sup>(8)</sup>つまり、われわれは「歴史の証言者の死」(＝記憶の臨界点)に直面している、という事実も忘れることができない。

第三の記憶観の変容については、とりわけ心理学と脳科学の分野で目立ちはじめた。従来の記憶観をひとことではいうならば、それは記憶の「貯蔵庫モデル」といってもよい。つまり、一度記憶されたものは、「オリジナルの記憶」として脳のどこかに貯蔵され、それらをよく思い出せないのは、引き出し方が悪いか、あるいは何かの阻害要因があるからだと考えられてきた。これに対して新しい記憶観は、記憶の「生成モデル」とでも呼べるもので、そもそも「オリジナルの記憶」を想定しない。むしろ、過去の出来事は、他者との対話やコミュニケーションの過程を通して、その都度「生成」され変容すると考える。この観点には、ニューロン（神経細胞）の結合（シナプス結合）と伝達物質のやりとりから記憶をとらえ、脳が可塑的であると考える脳科学の見解とも符合する<sup>10)</sup>。

さて、このような三つの大きな動きが連動し、さまざまな分野における記憶研究が活発化してきたが、それらの諸研究が潜在的にはある一定の方向性を共有しながらも、結局、隣接分野の知見を有効に生かしてこなかったのが現状である。そこで、諸分野の記憶研究に共通する視点を抽出しておきたい。それは、以下の三点に要約でき<sup>11)</sup>。

- (一) 記憶の社会性
- (二) 記憶の可塑性
- (三) 記憶の政治性

第一の社会性とは、記憶は脳のなかだけの出来事ではなく、他者とのコミュニケーションのなかでたちあらわれるという視点である。このことは、「想起する」という実践や「現在」という時間にも関連し、「想起する」という実践を通して、記憶が変容するという視点である<sup>12)</sup>。第三の政治性は、記念行事や記念碑の建立などを通して、国家統合や為政者の権力誇示といった政治的な目的のために、過去の出来事やイメージが操作的につくりかえられていくという視点である<sup>13)</sup>。

さて、以上のような諸前提をふまえて、記憶の社会学とはどのような視点をもつか。一般に、「記憶」と「社会学」という二つの言葉は結びつきにくい。しかし、前述のように、記憶に関する研究が、脳から社会性へと開かれてきていることを考えると、「記憶の社会学」が成立することが理解できる。そもそも記憶の社会学は、少なくとも一九二〇年代後半に、フランスのM・アルヴァックスによって構想されていたが、その後、半世紀以上のあいだ「忘却」されてきた<sup>14)</sup>。記憶の社会学は、おおむね次のことを明らかにするといえる。

- (一) 社会が個人の記憶や想起のありかたを方向づけるメカニズム。
- (二) 個人が想起という実践によって、過去に対するさまざまな

な集合的なイメージ（集合的記憶）を生み出すメカニズム。

(三) 集合的記憶が個人の思考や行動、さらには社会のシステムにおよぼす影響。

本稿では、(一)の視点から〈近代〉を分析することになる。そして、工業化や技術革新による物質的基盤（ハードウェア）と、制度・規範や思考様式（ソフトウェア）の変化が、人々がものごとを記憶したり想起したりするシステム、つまり〈記憶装置〉に、どのような影響をおよぼしたのが問題となる。それでは、まず〈近代〉における記憶術の登場について紹介することからはじめたい。

## 二、記憶術の登場

現在の受験勉強における歴史の年代記憶法や英単語記憶法の原型が、明治二十年代を中心とする記憶術ブーム<sup>18</sup>のなかで登場し、覚えかたの原理は、ほぼその時期に出つくしたということは、すでに『記憶術のススメ』のなかで指摘した。記憶術そのものは、ここでいう〈記憶装置〉そのものではないし、覚える方法、すなわちソフトウェアのひとつにすぎない。しかし、〈近代〉における記憶術の登場という出来事を通して、〈記憶装置〉の構成をみることができ。そこで、〈近代〉における記憶術の登場について、もういちど簡単に紹介しておく。

「暗記できぬほど増えた記憶法」(「团团珍聞」明治二十九年「二八九六」二月八日付)という狂句があるほどに、明治二十年代に記憶術が大流行した。このことは、ほとんど歴史の表舞台にあらわれたこととはない。「記憶術」というと、一般的には、いかにものごとを覚えるかという言葉の操作法や特定の思考法などのノウハウを思い浮かべるが、この時代にはやったものな中には、記憶力を増進するためにどのように身体を鍛えればよいかを説いた、いわば「ハードな」記憶術も少なくない。

たとえば、甲本精一編述『終身不忘之奇術——學術技芸一見早覚』（明治二十二年）などは、肉類・魚介類・野菜などの食べ物について、詳細にその効用と害について述べており、さながら図鑑のようである。また、記憶力を増進させるという薬の処方箋ものせられている。ただし、処方箋の薬学的根拠や、それぞれの成分にどのような効能があるかは不明である。平沢了元『記憶増進奇法』（明治二十二年）や松尾邦安『真誠記憶法』（明治二十四年）、谷内鉄次郎『記憶増進ノ秘法』（明治二十七年）なども同様の薬の処方箋をのせている。

このような身体のハード面を鍛える「ハードな」記憶術にみられる共通点は、住居や衣服を常に清潔にし、飲食類にも気をつける衛生管理の徹底と、薬による記憶力増進であった。また、興味深いのは、これらの「ハードな」記憶術が、一様に過度なセックスやオナ

ニーを戒めていることである。これは、当時流布していた「オナニー有害論」<sup>(19)</sup>と関係がある。日本のセクソロジー（性科学）の原点ともなったアストンの『造化機論』（明治八年）以来、オナニーが脊髄や脳をいためるという「オナニー有害論」が流布し、〈過度な性的行為↓脳機能の低下〉という図式が生まれた。さらに、当時、記憶が貯蔵される部位として「脳底」や「脳髄」という言葉が使われ、脳と記憶の関係が知られていた。記憶術の書物にも、多少の表現の差異はあるにせよ、「記憶は吾人の脳底に感ずるところの事物を保存するもの」とか、「総て耳目に入りたる事及び一度脳髄に感ずしたる事を永久に忘れざる之を記憶という」などという一文がみられる。これらは、おそらく心理学書の翻訳の影響であろう。いずれにせよ、〈過度な性的行為↓脳機能の低下↓記憶力の低下〉という図式はできあがっていたようだ。また、「精神病」の通俗的な病名である「脳病」「神経病」という用語が、明治二十年代から使われはじめており、さらに、当時さかんにメディアに登場した、「脳病」「神経病」の売薬広告は、視覚的にも人々の「脳」への関心を高めたと予想される<sup>(20)</sup>。

さて、「ハードな」記憶術に対して、覚えるためのノウハウ、いわばソフト面を論じた「ソフトな」記憶術についてもみてみよう。「ソフトな」記憶術に関する書物も多く出版されているが、そのなかでも体系だったものとして双璧をなすのが、和田守菊次郎の『和

田守記憶法』（明治二十八年）<sup>(21)</sup>と島田伊兵衛の『島田記憶術』（明治二十八年）である。ちなみに、明治期に出版された記憶術の書物のなかで、考案者の名前を冠したのは、この二人のものだけである。特に大阪の島田は、東京の和田守をかなり意識していたらしく、上京して、自分の考案した記憶術を試す公開実験会を開いているが、結果は失敗に終わっている。一方の和田守は、最初は代言人（現在の弁護士）であったが、詐欺事件で逮捕され、獄中で記憶術を考案したというエピソードの持ち主である。それだけではなく、和田守の記憶術は、実業家、渋沢栄一や公爵、近衛篤麿、講道館柔道の創始者、嘉納治五郎をはじめ、帝国大学の諸教授のあいだでも絶賛されたというが、これも歴史の表舞台にはあらわれないことである。また、和田守は「日本記憶学会」なるものも設立し、會員制の講習会や通信教育も行っていた。これは、明治十年代には全国的に拡大したと考えられる郵便網を前提としている。

「ソフトな」記憶術の内容はというと、どれもあまり大きな違いはない。具体例は煩雑であるので、紙面の関係上、ここでは割愛したい（「記憶術のススメ」を参照）。簡単にいえば、「イロハ」のようななじみのある文字配列を利用し、それらに覚えたい単語や語句を、語呂合わせを使って結びつけたり、語呂合わせを使った文章を作るだけである。現在の英単語記憶法や歴史の年代記憶法を思い出していただきたい。ただ、原理的には比較的単純な記憶術に対して、詳

細な原理原則が説明されている場合が多く、『和田守記憶法』などは四百十四頁にわたる大著であり、その原理原則を覚えるための記憶術が必要なくらいである。

さて、「ソフトな」記憶術で興味深いのは、友成新太郎『即席記憶法』（明治二十四年）や太田肇『記憶術』（明治二十八年）のように、記憶術の基礎となる文字配列として、故郷の人家をあびえているものがあることだ。つまり、故郷の隣人や家のならびかたを思い出し、それらに覚えたい単語や語句を結びつけていくのである。このような記憶術の背後には、地方から都市への人口移動という現象がある。見田宗介<sup>22</sup>が指摘したように、日本近代史において、明治二十年代と昭和元年ごろの二回、「民謡」の流行があったが、明治期のブームは、さらに明治二十二年（一八八九）と二十九年を中心とする二つのピークがみられる。これは、地方から都市への人口流入を前提としており、事実、この時期に人口の大規模な移動を可能にする鉄道網が整備されはじめる。たとえば、明治二十二年には東京―神戸間に東海道本線が開通し、二十四年には東北本線、二十六年には信越本線が全通している。

ところで、「ソフトな」記憶術自体は、古代より西洋に存在し、明治期にあらわれた記憶術の多くも、アルファベットをイロハにかえたりした、いわば西洋流の記憶術の翻案であるといえる<sup>23</sup>。一見、無数にあるようにみえる記憶術も、それらを仔細にみると、実は意

外に単純な原理に要約することができる。すなわち、「記号化」「配置」「関連づけ」の三つである。これは、現代の記憶術においても、あまり事情はかわらない。

「記号化」とは、覚えたい事柄を単純な記号、たとえばアルファベットやイロハに置き換えることである。記憶術というのは、そもそも複雑な世界、複雑な対象をできるだけ単純なシステムに置き換え、その単純なシステムのほうを覚えることによって、膨大な記憶の間を省くというものである<sup>24</sup>。したがって、「記号化」は記憶術において不可欠の要素である。「配置」は、覚えたい事柄や記号化されたものを、覚えやすいように並べることである。イメージを建物の上に置いて覚えていく西洋の古典的な記憶術は、その典型である。「関連づけ」は、記号化されたり配置された事柄を、様々な方法で結びつけていくことである。例としては、覚えたい事柄を並べて、ひとつの文章をつくり出す方法があげられる。

このような三つの原理は、〈近代〉の〈記憶装置〉を考える場合にも役立つ。そこで、次に教育システムのなかに〈記憶装置〉のありかたをさぐる。

### 三、記憶術としての教育システム

筆者は「記憶術のススメ」において、近代学校制度における教育システム自体が記憶術そのものではなかったか、と指摘した<sup>25</sup>。これ

は、二つのことを意味している。第一に、さまざまな構造的要因によって、〈近代〉の教室空間が暗記の強制へとむかわざるをえなかったこと。第二に、教室空間における道具立て（＝ハードウェア）が、前述した記憶術の原理を暗黙のうちに活用していたこと、である。

前者における構造的要因は、以下の四点に要約できる。

- (一) 「立身出世」イデオロギーの登場と競争社会の到来。
- (二) 試験の過熱化。

- (三) 教室空間におけるソフトウェア・ハードウェアの変容。

- (四) 教員の速成と授業のマニユアル化。

福沢諭吉『学問のススメ』（明治五年）の冒頭にある、「天は人の上に人を造らず……」にはじまるくだりは、一般の理解とは異なり、四民平等のバラ色の未来を予言する「福音」というよりかは、むしろ「競争社会へのプレリュード」と理解したほうがよい。つまり、万人は生まれながらにして平等ではあるが、そこから先は学問の有無によって人生が決まるといっているのである。そして、『学問のススメ』の半年後、「学制」発布の前日に出された「被仰出書」（太政官布達第二一四号）では、学校教育における知識と技術の修得が、立身出世の最低条件であることが示唆されている。このような動きのなかで、『学問のススメ』とスマイルズの『西国立志編』（明治三、四年）をバイブルとする「立身出世」イデオロギーがあらわれる。

立身出世をなしとげるためには、学問を修得するだけではなく、数々の試験に合格する必要があった。そこで、「受験」や「受験生」という言葉が、特別の意味をもつようになる。試験のために多くの事柄を記憶する必要に迫られた「受験生」の存在と、前述の記憶術ブームは無関係ではない。学校教育においては、教育政策の最高顧問として文部省に招聘された、D・モルレー（一八三〇～一九〇五）が導入した、「等級」別の教育、進級試験、合格者への証書の授与、という「アメとムチ」のシステムが定着し、試験は次第に過熱化していった<sup>27)</sup>。

教育空間においては、それまでの寺子屋的な教授法から、学級の全生徒に対して、同時に同一の教育内容を教授する「一斉教授法」への変化がみられた。このソフトウェアの変化は、ハードウェアの変化と連動しており、寺子屋以来の軽量小型で移動しやすい天神机から、生徒が教師と対面して腰掛けるタイプの机と腰掛けへの変化がみられた<sup>28)</sup>。このことは、正座から椅子にすわるという身体実践の洋風化をもたらした<sup>29)</sup>。

さて、一斉教授法の導入と切り離して考えることができないのは、「問答法」の導入である。これは、わが国初の小学校教員養成機関、師範学校（明治五年設立）で指導にあたっていた、アメリカ人M・スコット（一八四三～一九二二）の影響を受けて導入された。その内容は、教室に掛けられる、さまざまな「掛け図」を利用した問答

である。その起源は、スイスの教育学者、J・H・ペスタロッチ（二七四六〜一八二七）の教育思想にもとづく「オブジェクト・レッスン」(Object Lesson)であり、「庶物指教」と訳されていた。これはもともと、暗記に終始する教育への反省から、できるだけいろいろなモノ（庶物）にふれさせたり、具体的なモノを通して、モノや現象に対する自発的な探求心や理解を深めようとするものであった。しかし、すべての実物を教材として利用することは困難であり、その代用として掛け図が利用されはじめた。日本に輸入された、掛け図を利用した教育法は、スイスのペスタロッチ主義が、イギリス、カナダ、アメリカを経由するうちに形骸化したものであった。そのため、元の精神は忘れられ、生徒の自発性を引きだすべき問答法が、皮肉にも暗記の強制へと転化していった。たとえば、スコットの教授法を普及すべく、師範学校の初代校長、諸葛信澄が書いた『小学教師必携』（明治六年）の「下等小学第八級 問答」には、次のような例がのせられている。

柿トイフ物ハ、如何ナル物ナリヤ、○柿ノ木ニ熟スル実ナリ、  
何ノ用タル物タリヤ、○果物ノ一種ニシテ、食物トナルモノナ  
リ、  
如何ニシテ食スルヤ、○多ク生ニシテ食シ、希ニハ、乾シテ食  
スルモアリ、……

このように、丸（○）を境として、教師が問う部分と生徒が答える部分に分かれ、単語図（掛け図の一種）に書かれた柿をさして教師が問い、それに生徒が答える。各問ごとに一人の生徒が答え終わると、全員がこれを復唱する。ここで重要なのは、この問答が、前記のような「台本」にしたがって、一字一句間違わずに答えなければならぬ、ということである。つまり、答えはひとつしかないものであり、完璧な暗記が目的とされた。

このように、学校教育が暗記の強制へと転化していった背景には、教員を速成しなければならぬという、差し迫った現実があった。「学制」（明治五年）では、二十歳以上の男女で、師範学校か中学校の卒業証書をもっている者は教員資格がある、と定められていたが、明治七年には、小学校の数はすでに二万校以上にのぼり、この規定に適合した教員を配置することは不可能だった<sup>30</sup>。そこで政府は規制緩和し、各種試験による教員資格の授与を実施した。このような状況のなかで、十分な教育技能もないままに教育現場に配置された教師たちには、自分がしゃべる台詞だけではなく、生徒がしゃべる台詞も明確に書かれた台本が必要だった。以上のような構造的要因が、教室空間における暗記の強制という現象を生んだと考えられる。また、豊田久亀<sup>31</sup>が指摘するように、少なくとも「学制」初期においては、古典の素読という従来の教育法が残っており、そのことも、問



答法による授業が暗記の強制へと傾いていった一因であると考えられる。

なお、暗記を強制するような授業方法に対する批判があったことも、付言しておく必要がある。たとえば、文部官僚として学事視察をおこなった西村茂樹は、教育現場で実践されている問答法が、本来の「オブジェクト・レッスン」とは似て非なるものであることを見抜いていたし<sup>33)</sup>、和歌山県学務課の下村房次郎も、明治十年、単語問答について、「児童軟弱ノ脳裏ニ記憶ヲ強任」し、「大ニ理会ノ才ヲ障害」していると指摘し、舟を見たこともない山村の子どもに、「權ハ如何ナルモノカ」と問うたり、熊を見たこともない海辺の子どもに、「熊ハ如何ナルモノカ」などと問うても意味がないと批判している<sup>34)</sup>。また、その後にも、「従来空誦暗記ノ弊ヲ一洗シ教授ノ方法ヲシテ心性開發ノ点ニ傾向セシムル」ことをめざした、若林虎三郎と白井毅の『改正教授法』（明治十六年）が出版され、暗記・注入型の授業から子どもの自己発達を促進するような授業への展開が試みられた。しかし、その試みも、教師の問と生徒の答をあらかじめ用意した形式主義へと陥ってしまった<sup>35)</sup>。

さて、教室空間における道具立てが、記憶術の原理を暗黙のうちに活用していた、ということについてふれておく。これは、おもに問答法における掛け図にみられる。明治六年、師範学校では、M・ウィルソンとN・A・カルキンの『学校家庭掛図』を翻案し、「五

十音図」「単語図」「連語図」をはじめ計二十八枚の掛け図を刊行した。たとえば、『小学教師必携』（前述）の「五十音図」の指導法にはこうある。「五十音図を教えるときは、子音と母音の区別を教え、たのち、行（アイウエオ）と列（アカサタナ）の区別を教え、暗記させるために、五十音図のなかの一字を黒板に書き、これはどの行でどの列の文字かを問うのがよい」。これは、まさに古典的な記憶術の手法で、記憶すべき事柄を場所（ここでは行と列）とともにおぼえるものであり、前述の「配置」という原理に対応する。また、「連語図」は、テーマ別に、人間・学校・場所・地理・食物をはじめ十種にわかれ、各項の最初にいくつかの単語をあげ、次にそれらを含んだ文章があげられている。たとえば、「勉強は健康より生り〇健康は養生より来る〇養生の人は食物と飲物をえらび勉強の者は朝寝と昼寝を戒む」（傍点は筆者）というように、単語が数珠つなぎになっている。これは、記憶すべき単語を文章にして、リズムよく覚えられる工夫であり、前述の「関連づけ」という記憶術の原理に対応する。

人類学者J・グディが指摘するように、「リストは、部類の視覚性と明確さを増大させるものであり、……記憶再生に重要な情報の序列的秩序化を行なうことを容易にする<sup>36)</sup>」。さらに、表の体裁や配置は、言語記憶を組織化し、分類や想起に影響をおよぼす<sup>37)</sup>。掛け図の編者たちが、記憶術をどの程度意識していたかは不明だが、結果

的には、覚えやすさを配慮した構成になっている。<sup>38)</sup>

#### 四、網羅と一覧——モノ・コトの増殖と表象のインフレ

— ション

すでに述べたように、記憶術というのは、複雑な世界や対象をできるだけシンプルなシステムに置き換え、そのシンプルなほうを覚えることによって、膨大な記憶の手間を省くというものだった。

〈近代〉における記憶術の登場は、凄まじいまでのモノとコトの増殖、さらには、それらに対する表象の増殖と無関係ではないだろう。記憶術は、モノ・コト・表象の増殖に直面して、それらが自分の視野におさまるようにシンプル化する実践ではなかったか。

ベストセラーとなった服部撫松の『東京新繁盛記』（明治七年）が描いた東京は、前田愛が指摘したように、文明開化の記号としてのモノがひしめく陳列場であったといえる。「銀座の煉瓦街・国立第一銀行などのへたてもの」があり、人力車・馬車・蒸気車などの「へりもの」があり、ランプ・ビール・シャボンなどの「へしなもの」があり、西洋眼鏡、博覧会などの「へみせもの」がある。これらのモノの集合には、『文明開化』のカタログを読者に提供する啓蒙的な意図がこめられていた。<sup>39)</sup>さらに、モノやコトだけではなく、翻訳語の増殖にみられるように、表象も増殖した。ただし、それは「増殖」というよりかは、表象の「インフレーション」に近かった。<sup>40)</sup>な

ぜならば、翻訳すべきひとつの原語に対して、複数の訳語が登場したからである。

森岡健二は、明治から大正にかけての英和辞典における訳語の変遷を詳細に研究し、それをいくつかの段階にわけて分析している。<sup>41)</sup>

明治五年以前は、英語学がなれば蘭学に依存し、英蘭辞典と蘭和辞典を対照させながら訳語がつけられ、その語彙も江戸語と認められるものが多かった。この時期の代表的なものとしては、堀達之助等の『英和対訳袖珍辞典』（文久二年「二八六二」）がある。明治六年から二十年にかけては、蘭学の影響をやや脱したものの、今度は新たな拠り所として、英華辞書つまり英語—中国語の辞書が用いられた。江戸語から現代語にいたる過渡期で、漢語と和語（ふりがな）を組み合わせ、ひとつの訳語が新旧両面をかねそなえているという特徴がある。この時期の代表は柴田昌吉・子安峻の『附音挿図 英和語彙』（明治六年）で、後の辞書に大きな影響をおよぼした。明治二十一年から四十四年で、ようやく訳語は英華辞書から脱し、日本人独自の訳が試みられる。現代訳語に非常に近づくのは、この時期である。この時期の代表は、島田豊纂訳『附音挿図 和訳英字彙』（アーサー・ロイド序、曲直瀬愛校訂、杉浦重剛・井上十吉校閲、明治二十一年）と、イーストレーキ、棚橋一郎共訳『ウエブスター氏新刊大辞典 和訳字彙』（明治二十一年）である。明治六年から二十一年の十五年間に、文明、政治、経済、社会などをはじめとする

「新造漢語」、つまり外来語を音訳・カタカナ表記せずに意識した造語が、ほぼ出尽くしたといわれる<sup>(註)</sup>。しかし、この間、訳語は混乱をきたした。たとえば、「abstract」という単語には、「拔萃」「バツスイ」「撮要」「異リタル」「抽象」など、さまざまな訳語がつけられていた。

さて、モノ・コトの増殖と表象のインフレーションに対する方策として考えだされたのは、モノ・コト・表象を〈集め↓並べ↓分類する〉という博物学的な視点だった。たとえば、明治に刊行された節用集の流れをくむ日用百科事典の類は、網羅性と一覧性をその特徴としている。しかも興味深いことに、それらのなかには、「暗記」や「記憶」という言葉を書名に含むものもあり、増殖するモノ・コト・表象を記憶することへの関心を象徴しているといえる。

明治八年（一八七五）に出版された清原宜道編『暗記便覧表』は、歴代天皇、元号、五十音、九九、ローマ字、アルファベット、時数表、六大州、度量衡などが一枚の紙面に、一覧表形式で載せられている。また、柳原義三の『しらぬは恥（記憶千金）』（イーグル書房、明治二十年十月）は、「政府の事」「府県庁の事」「代言人の事」などをはじめ十六件についての知識を載せている。明治十九年から二十年にかけて、大阪の忠雅堂からだされた樋口文二郎の『現今活用記憶一事千金』は、三巻ものの和装本で全七九二頁にわたる。懐に入れて携帯することを目的としていたらしく、七センチ×十三センチ

という小型ながら、その中にはおびただしい量の知識が詰め込まれている。大日本神代略系図や帝王歴代表といった皇室関係の記事が本題にはいる前におかれ、以下二十三のテーマに関する知識が、豊富な図表とともに羅列されている。

○諸規則之部／印税規則○南宗画独学○石印篆刻独学○和歌詠心得之大概○俳諧式大概○煎茶ノ独学○茶湯独学大概○活花独稽古○鉢山図式並培養法○盆栽培養法ノ大概○庭造心得並図式○西洋料理大概○和洋妙術秘伝○家相可否弁解ノ略記○活益日用文之部○商家日用文之部○横文字独稽古之部○内国名郡名○内国各港航海里程表○国立銀行○諸規則追集之部○諸証書之文式○商家実益心得ノ弁

明治二十九年十二月に大阪でだされた川原梶三郎の『記憶大全 知恵の礎（一名浪花みやげ）』も同様の性格をもっていた。

自らを「碩亭の主人閑舟」と洒落こんだ著者の序文「巻開きの口上」によると、古本を涉猟していると、大博士になるのも不可能ではないと確信して以来、古本屋をあさりまわり、この本を書くために買い集めた書物はおよそ「十千万貫」にのぼるといふ。おそらく「白髪三千丈」の類の誇張であると考えられるが、その後、著者は本の性格を次のように簡潔に述べている。

「諸芸百般諸学一切翠を抜きたる早学び。日本名勝の道案内さ  
ては商売の手引種農工諸氏の心得種。顔触れ名高き浪花の賑ひ  
何や彼やを取り交せて新しきも物織<sup>もの</sup>天狗の虎の巻。秘術密法惜  
無く網羅<sup>かき</sup>蒐集<sup>あつ</sup>め以て浪花土産と名題を揚げ……」

具体的な内容としては、「大阪名勝案内記」にはじまり、「つや文  
の手本」(ラブレターの書き方)、「衛生害有 合食禁止心得鑑」、「英  
語学独習書」などから「大阪市街商工業有名家繁栄鑑」にいたる五  
十九項目が載せられている。記述の方法としては、江戸時代からの  
番付形式を踏襲しているものがほとんどだが、「網羅<sup>かき</sup>蒐集<sup>あつ</sup>め」とい  
う言葉のしめすように、その網羅性に特徴がある。

これらは前述のように、節用集の流れをくむものである。節用集  
は、室町時代後半に成立した、いろは配列の仮名引き漢語辞書であ  
るが、近世になると、『江戸大節用海内蔵』(一七〇四)や『大日本  
永代節用無尽蔵』(一七五二)に代表されるように、日用百科事典  
の体裁をとったものもあらわれる。そして、明治二十七年(一八九  
四)には、博文館から一二〇〇頁にわたる『伝家宝典明治節用大  
全』が、「人生日常必須ノ事項最大網羅シ」という意図のもとに出  
版される。ここにいたって、節用集の構成原理はすっかり変容し、  
横山俊夫がいうように、「人がハイ・ライフを目ざそうとするなら

身につけなくてはならない、あれこれの「文明的」と考えられた生  
活のかたちに終始するもの」(傍点は原文)となった。

さて、情報の一覽性という意味では、活版印刷の新聞の登場にも  
ふれておく必要がある。明治三年十二月八日に創刊され、日本で最  
初の活版印刷新聞である『横浜毎日新聞』は、一風変わった紙面構  
成をしていた。両替相場、米飛脚船出入日限、英仏飛脚船出入日限、  
西洋新聞、失物、告白、売物などの見出しがつけられ、すべての動  
きが一目で見渡せる一覽表的なレイアウトになっている。世界に開  
かれた貿易都市という土地柄からか、横浜を定点とした世界の動き  
を一日単位でみせてくれる仕組みになっている。

情報の一覽性は、どの要素がどの位置にあるのかという、空間的  
位置づけが把握できる仕組みであり、「配置」という記憶術の原理  
に照らし合わせてみた場合に重要である。

## 五、参照系の変容

ものごとを記憶する際に、もつとも基本となるのが「参照系」で  
ある。つまり、アルファベットや五十音といった基礎的な文字配列  
や、モノやコトを組織化する分類体系<sup>(4)</sup>である。この参照系は、(近  
代)に大きく変容したと考えられる。そこで、最後に、参照系の変  
容についてふれておきたい。

前述のように、教室空間では五十音図の掛け図が導入され、五十

音順による文字配列が教育された。もちろん、厳密にいうと、イロハ順の文字配列は、その後も長く並存していた。しかし、知識の組織化においては、五十音順の配列が不可欠になってきた。たとえば、大槻文彦（一八四七〜一九二八）による『言海』をみてみよう。これは、明治二十二年（一八八九）五月から翌々年四月にかけて、大判四冊の和本として出版され、和漢語、外来語など約三万九千語を収録した、わが国初の普通語の辞書である。その配列は、「ウエブスター辞典」を範とした五十音配列になっている。紀田順一郎によると、大槻は『言海』の出版祝賀会での、次のようなエピソードを残しているという。「大槻」文彦が出来上がった『言海』一冊を持参したところ、福沢（諭吉）は『結構なものが出来ましたナ』といながら見ていたが、語彙が五十音であるのを見て眉をひそめ、『寄席の下足が五十音でいけますか』と批判した。文彦は、小学校でもこの二十年らい五十音を教えているのにも思ったが、口には出さなかった<sup>(45)</sup>という。幕末維新の知識人ですら、この参照系の革新には、容易に受けいけなかったようである。

この五十音順の配列という参照系の革新は、物集高見（一八四七〜一九二八）の『廣文庫』と『群書索引』という二つの類書に結実する。この二書は、大正五年（一九一六）から十八年にかけて刊行され、主題別に書物の内容を分類編成した百科全書（類書）で、和漢書や仏書など十数万冊から、地理、生物、文物などに関する約五

万項目を抽出し、五十音順に配列している。物集は明治十九年に類書の編纂を思いいついているが、そのころ編纂が進行していた『古書類苑』も博搜、天部、歳事部、地部……人部、姓名部などの古典的な分類によっていた。幕末維新までの知識人は、おおむね「天・地・人……」といった分類や、「イロハ」による分類しか思いつかなかったのである。紀田順一郎がいうように、「近代的な学問を中心とする情報量が増えるにしたがい、『いろは』順が適さなくなってきたが、その改革の先駆となったのが物集高見である<sup>(46)</sup>」といえる。

さて、参照系について語るとき、〈近代〉の図書館制度についてふれておく必要がある。日本の国立図書館は、当初、幕府の文庫や諸藩所蔵の貴重書、明治新政府の官僚たちが蒐集した洋書類で構成されていた。したがって、閉鎖的かつ官僚的な色彩が強く、国民の共有財産としての図書館、つまり「ナショナル・ライブラリー」の発想はほとんどなかった。むしろ、明治五年に京都に開設された集書院などは、わが国初の開架式図書館で、入館者は自由に図書を閲覧することができた。その意味では、それこそ「パブリック・ライブラリー」と呼ぶにふさわしかったが、入館者の少なさから、わずか十年で閉鎖された<sup>(47)</sup>。知識のアーカイヴとしての図書館と、それを広く共有するという観念が明確になってきたのは、東京帝国大学総長、貴族院議員であった外山正一（一八四八〜一九〇〇）の提案により、明治三十年、帝国図書館の新館が建設されてからであった。

ハードウェアとしての図書館はともかくとして、ソフトウェアともいえる図書分類についてはどうだろう。配架の様式、つまり書物をどのように書棚に配置するかは、知的世界像の構成をそのまま反映するものである<sup>⑧</sup>。日本で十進分類法をもっと早く導入したのは、明治三十一年、京都府立図書館のことだった。といっても、いわゆるデュイイの分類法とは異なり、日本的にアレンジされたものだった。三十一年という年は、帝国図書館が新発足した年であり、それまでのような漢籍、国書、仏書といった区別ではなく、内容による統一分類が必要になったと考えられる。しかし、図書館によっては、図書のラベルが配架の位置番号を意味し、図書分類と配架とは別立てに考えられたケースもあり、雑多な分野の書籍が、同じ棚に同居するということがあったらしい<sup>⑨</sup>。

さて、図書分類の次に索引システムについてはどうか。前述のように、一般市民に開かれた図書館という発想は、日本では乏しかった。近代以前にも、高野山のように多数の蔵書を擁する寺院もあったが、紀田順一郎が指摘するように、それも開かれた知的生産の機関としては機能せず、その蔵書体系は空海などの天才の頭脳のなかでしか生かされなかった。そして、「西洋中世の記憶術が秘教的要素をはらみながら方法論的には開かれてきて、近代の索引システムへと発展したのは、あまりにも対照的に」、日本の場合、書籍の内容に手軽のアクセスする手段としての索引システムを構築してこ

なかった。ちなみに、日本に図書館カードが導入されたのが、ようやく明治二十三年（一八九〇）になってからのことである。前述した大槻文彦の『言海』や、物集高見の『廣文庫』と『群書索引』などは、〈近代〉における索引システムにおける革新的業績であったといえる。

では最後に、配架の様式を変化させた、ハードウェアの変化についてもふれておく。紅野謙介は、活版印刷が新聞メディアにおける情報の再編と高速化を可能にしたのとは対照的に、書物は「速度をゆるめることを通して、情報を伝達目的から容量の大きい記憶の蓄積へと展開」したという。それを象徴するのは、明治十年（一八七七）に出た『改正 西国立志編』である。明治三、四年に出された和装本の十一冊におよぶ分冊形式とは異なり、こちらは七六四頁におよぶ活版印刷による洋装本となっている。この記憶容量を激増させた洋装本は、分冊されていた内容を一本化することで、全体という視点を獲得しただけではなく、棚に立てて置かれることを前提としていた。紅野がいうように、「和本があくまでも横に平づみにして保存されるのに対して、洋書は表題と著者名を刻んだ新鮮な装幀の背をさらすことで、潜在的に読者をひきつけていく。あるいはまたたえず自らの存在を主張し、忘れるなというメッセージを送りつづけるのだ。内容において明治の立身出世主義のエトスを支えたこの書物のモノとしての役割は、そうした記憶の活性化にもあつ

た」。

活版印刷と洋装形式という新しいテクノロジーが採用された背景には、紙生産に関する技術革新があった。手作業による叩解と手漉きによる和紙から、木材パルプと叩解機、抄紙機によって、洋紙は質的に向上するとともに、大量生産が可能になり、低価格化が実現した。明治二十年から三十年にかけての和紙の総生産量が倍増であるのに対して、洋紙の国内総生産量は七倍増になったという。

いずれにせよ、和装本の「平づみ」から洋装本の「縦置き」へと  
いう変化は、書架と本の位置感覚を組織化し、蔵書の空間的把握を  
可能にした。これは、場所と表象を関連づけて記憶する、古典的な  
記憶術の原理とも通じ合う。

### むすび

本稿では、〈近代〉をそれまでの時代とは異なったタイプの〈記憶装置〉、つまり人々がものごとを記憶／想起するシステムが誕生した時代として描こうとした。そのシステムを象徴するものが、明治二十年代を中心とする記憶術の登場であった。そして、意識的であれ無意識的であれ、さまざまな分野に記憶術の原理が活用され、モノや制度の体系においても、記憶術の実践を容易にするような道具立てが誕生したといえる。記憶術の原理とは、つまるところ「記号化」「配置」「関連づけ」という三つに要約することができる。そ

して、この三つの原理に照らし合わせて、議論をすすめてきた。以下、その要点をまとめておく。

教育制度の内部において、「立身出世」イデオロギーと競争の激化、試験制度の導入などによって、多くの事柄を記憶する必要にせまられた「受験生」という存在が登場する。このことは、記憶術の登場とも符合する。教室空間では、一斉教授法と問答法が導入されたが、教員を速成しなければならなかった背景や、形骸化された問答法が輸入されたことなどの諸事情が重なり合い、問答法が本来めざした教育理念からは逸脱し、教育が暗記の強制に陥ってしまった。さらに、この暗記のシステムは、掛け図という道具立てにも支えられ、そこには記憶術の原理が視覚的に再現されていた。

さて、〈近代〉はモノ・コトの凄まじい増殖と表象のインフレーションという言葉によって特徴づけることも可能である。それらを、ひとまず自分の視野におさめようとする実践が記憶術ではなかったか。この「増殖」と「インフレーション」に対する方策は、日用百科事典や新聞などにみられた網羅性や一覧性という特質にみられた。また、活版印刷技術は文字の視覚化を促進した。視覚化された情報とその一覧性は、情報の組織化を容易にし、そのことは分類や想起にも影響をおよぼしたと考えられる。

そして、最後に、ものごとを記憶する際の基本となる参照系の変容について論じた。五十音配列のリファレンス類の登場は、それま

での参照系を大きく変えていった。図書館においても、新しい分類法が導入され、次第に索引システムも開発されはじめた。また、技術革新による洋紙の飛躍的な生産量の増加で、和装本から洋装本への転換がおこり、同時にそれは、平づみから縦置きという、配架方式の転換もひきおこした。このことは、書架と書物の位置関係を組織化するとともに、蔵書の空間的把握を可能にした。

このように〈近代〉は、基礎的な文字の配列や分類体系といった参照系の変容と、それに連動したハードウェアの変化、さらには教育を含めた学問体系の変化などがあいまって、大きな〈記憶装置〉が作りあげられた時代である。その装置は、人々の認知様式、さらには記憶／想起の様式を方向づけ、それらの様式は、それ以前のものとは根本的に異なっていたのではないだろうか。

〈近代〉をめぐる記憶の社会学は、その様式の内実をさらに分析していく必要があるが、それは他稿にゆずることとする。

## 注

- (1) 岩井洋『記憶術のススメ——近代日本と立身出世』青弓社、一九九七。
- (2) 本稿のようなアプローチにとって、〈近代〉を対象とした研究としては、川村邦光『幻視する近代空間』（青弓社、一九九〇）、李

孝徳『表象空間の近代——明治「日本」のメディア編成』（新曜社、一九九六）や成田龍一『故郷』という物語——都市空間の歴史学』（吉川弘文館、一九九八）などが参考になる。なお、筆者の川村の著書に対する書評（『宗教研究』二八五、一九九〇）も参照。

(3) グローバリゼーションについては、R・ロバートソン（阿部美哉訳）『グローバリゼーション—地球文化の社会学理論』抄訳（東京大学出版会、一九九七）、國學院大學日本文化研究所編『グローバル化と民族文化』（新書館、一九九七）などを参照。

(4) ファンダメンタリズム (fundamentalism) の運動も、この文脈のなかで理解できる。井上順孝・大塚和夫編『ファンダメンタリズムとは何か——世俗主義への挑戦』（新曜社、一九九四）およびこれに対する筆者の書評（『國學院雑誌』第九六巻四号、一九九五）、白杵陽『原理主義』（岩波書店、一九九九）などを参照。

(5) 歴史学・人類学の古典のひとつとなった、E・ホブズボウムとT・レンジャーの『創られた伝統』（前川啓治・梶原景昭訳、紀伊國屋書店書店、一九九六）も、十九世紀、近代国家形成期の西欧における記念行為の広まりと高まりを描いている。また、ナシヨナリズム研究の古典のひとつ、B・アンダーソンの『想像の共同体——ナシヨナリズムの起源と流行』（白石隆・白石さや訳、リブポポト、一九八七）原書は一九八三の増補版（NIT出版、一九九七）原書は一九九二に、「記憶と忘却」という一章が加えられたことは象徴的である。

(6) 本来、「記憶」という言葉を使う場合、出来事を体験した主体と想起する主体が同一でなければならない。しかし、ここでは「集



- 合表象」としての「記憶」を意味している。
- (7) 高橋哲哉『記憶のエチカ——戦争・哲学・アウシュヴィッツ』(岩波書店、一九九五)、小森陽一・高橋哲哉編『ナショナル・ヒストリーを超えて』(東京大学出版会、一九九八)、岡真理『記憶／物語』(岩波書店、二〇〇〇)などを参照。
- (8) 野家啓一「記憶と歴史1——失われた〈時〉を求めて」『へるめす』五五、一九九五、十五頁。
- (9) 「生成モデル」という用語は、筆者が「想起することと歴史をつくること」(『現代のエスプリ』二九八、一九九二)において使ったものである。
- (10) 脳の可塑性については、塚原伸晃『脳の可塑性と記憶』(紀伊國屋書店、一九八七)を参照。
- (11) 岩井洋「記憶の地勢学——ニューロンからコメントまで」(未発表)。
- (12) 以下の文献を参照。F・C・バートレット(宇津木保・辻正三訳)『想起の心理学』誠信書房、一九八三。『エロジカル・マインド』(『現代のエスプリ』二九八、一九九二)。港千尋『記憶——「創造」と「想起」の力』講談社、一九九六。G・コーエン(川口潤他訳)『日常記憶の心理学』サイエンス社、一九九二。U・ナイサー編(富田達彦訳)『観察された記憶——自然文脈での想起』(上・下)誠信書房、一九八八、一九八九。D. Middleton and D. Edwards(eds) *Collective Remembering*. London: Sage, 1990. Thomas. Butler(ed), *Memory*, Oxford: Basil Blackwell, 1989.
- (13) 以下の文献を参照。浜田寿美男『自白の研究』三一書房、一九九二。E・F・ロフタス/K・ケッチャム(巖島行雄訳)『目撃証言』岩波書店、二〇〇〇。E・F・ロフタス/K・ケッチャム(仲真紀子訳)『抑圧された記憶の神話』誠信書房、二〇〇〇。菊野春雄『嘘をつく記憶——目撃・自白・証言のメカニズム』講談社、二〇〇〇。
- (14) 以下の文献を参照。J・ル・ゴフ(立川孝一訳)『歴史と記憶』法政大学出版局、一九九九。阿部安成他『記憶のかたち——コメモレイションの文化史』柏書房、一九九九。D・ダヤーン/E・カッツ(浅見克彦訳)『メディア・イベント——歴史をつくるメディア・セレモニー』青弓社、一九九六。石田雄『記憶と忘却の政治学——同化政策・戦争責任・集合的記憶』明石書店、二〇〇〇。Pierre Nora (ed) *Les Lieux de Mémoire*, 3 vols, Paris: Gallimard, 1984-92. Mary Douglas, *How Institutions Think*, NY: Syracuse Univ. Press, 1986. Paul Connerton, *How Societies Remember*, Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1989. Patrick H. Hutton, *History as an Art of Memory*, London: Univ. Press of New England, 1993.
- (15) Maurice Halbwachs, *Les cadres sociaux de la mémoire*, Paris: PUF, 1925. *La topographie légendaire des évangiles en terre sainte*, Paris: PUF, 1941. *La mémoire collective*, Paris: PUF, 1950 (小関藤一郎訳『集合的記憶』行路社、一九八九) なお、記憶の社会学全般については、岩井洋「記憶の社会学的定義」(『年報社会学論集』「関東社会学会」三、一九九〇)、『同「想起の社会学にむけて」』(『国学院大学日本文化研究所紀要』七、一九九三)などを参照。
- (16) いままで、『集合的記憶』をのぞいて、英語に翻訳されたこと

がなかったアルヴァックスの著作のダイジェスト版が、一九九二年「社会学の遺産」(The Heritage of Sociology) シリーズの一冊として編集・翻訳されたことは、記憶に対する社会科学的関心の高まりを象徴している。Maurice Halbwachs, *On Collective Memory*, edited and translated by Lewis A. Coser, Chicago: Univ. of Chicago Press, 1992.

(17) 〈近代〉の空間的な構成を分析する場合、しばしば「都市の記憶」や「建物が歴史を記憶している」などという詩的な表現が用いられる。しかし、いうまでもなく都市や建築物が主体として出来事を記憶するわけではない。記憶するのは、あくまでも人間の身体であり、都市や建築物は想起の手がかり、いわば「参照系」にすぎない。

(18) 筆者の文献調査では、大正十年代と一九七〇年代にも記憶術に関する本が多く出版されている。また、明治二十年代には、宮武外骨の『忘却法』や井上円了の『失念術講義』など、「忘れるための技術」に関する本も出版されている。

(19) 赤川学「オナーの歴史社会学」『セクシュアリティの社会学』(岩波講座 現代社会学十) 岩波書店、一九九六、を参照。

(20) 注(1) 前掲書、八二―三頁、参照。

(21) 石井研堂の『明治事物起源』(橋南堂、明治四十一年)には、「和田守菊次郎、記憶術の発明を発表せしは、明治二十八年なり、所々にてその実験を試み、連絡なき数字等を言い中てること、これ掌上に探るが如し。同年七月ごろ、類似の同法、陸統世に出づ」とあり、和田守を記憶術の最初の発明者としているが、現実には、そ

れ以前にも記憶術の書物が出版されている。

ちなみに、和田守の息子謙二も、昭和三十二年(一九五七)に、『和田守記憶法英和辞典』(国会図書館所蔵)なる謄写版印刷の私家版を出版しており、親子二代にわたって人生を記憶術にかけた。詳細は、注(1) 前掲書を参照。

(22) 見田宗介『近代日本の心情の歴史』講談社、一九七八。

(23) 稗田阿礼や空海に、日本の記憶術の起源を求めるとあるが、これらは多分に秘儀的であり、明治期に登場した記憶術の多くとは、直接のつながりはないと考えられる。

なお、西洋の記憶術については、F・A・イエイツの古典的な著作『記憶術』(玉泉八州男監訳、水声社、一九九三)や、それを超える力作であるM・カラザースの『記憶術と書物——中世ヨーロッパの情報文化』(別宮貞徳監訳、工作社、一九九七)などを参照。

(24) 高山宏『パラダイム・ヒストリー』河出書房新社、一九八七、八五―六頁。

(25) 注(1) 前掲書、第四章、参照。

(26) 「立身出世」については、竹内洋の『立身・苦学・出世』(講談社、一九九一)および『立身出世と日本人』(日本放送出版協会、一九九六)を参照。

(27) モルレーは明治十一年に日本を去っているが、天野郁夫(試験の社会史)東京大学出版会、一九八三)が指摘するように、そのころにはすでに、試験制度は小学校から大学まで、すっかり根をおろしていた。

(28) 教室空間における「ハードウェア」については、石附実編『近

- 代日本の学校文化誌』(思文閣出版、一九九二)を参照。
- (29) この背後には、国民の体位向上と健康増進をめざす「衛生学的な」疑惑があった。注(1)前掲書、一五〇—一五二頁、参照。
- (30) 文部省の『学校基本調査』によると、一九九五年現在の小学校数でさえ二万四千五百四十九校であるから、その困難さは容易に理解できる。
- (31) 豊田久亀『明治期発問論の研究——授業成立の原点を探る』ミネルヴァ書房、一九八八、八一頁。
- (32) 「学制」初期には、「口授と授読と練習と暗記復誦とが根幹」となった「寺子屋の教授方式」の域を出ていなかった、という指摘もある。『東京学芸大学昭和一九年度特別研究報告・明治初期における初等中等教育研究の歴史的考察』一九五五(注(31)前掲書、二七四頁より再引用)。
- (33) 注(31)前掲書、八四—八五頁。ただし、西村自身が編纂した『小学修身訓』(明治十三)には、「修身学ノ書ハ宜シク生徒ヲシテ熟読暗記セシムベシ」とあり、道徳に関しては、暗記を推奨していた。
- (34) 注(31)前掲書、八六—八七頁。
- (35) 注(31)前掲書、第二章、第四章、参照。
- (36) J・グディ(吉田禎吾訳)『未開と文明』岩波書店、一九八六、二〇七—八頁。
- (37) 注(36)前掲書、二八九頁。
- (38) 掛け図や教科書の成立過程については、中村紀久二『教科書の社会史——明治維新から敗戦まで』(岩波新書、一九九二)を参照。
- (39) 小木新造・前田愛編『明治大正図誌』第一巻、筑摩書房、一九七八、六四頁。
- (40) ここではふれないが、明治維新前後から唱えられていた「漢字廃止論」、つまり漢字を廃止して国字を仮名かローマ字にしようとする思想や、かな文字運動などの動きも、「表象のインフレーション」を促進した。ローマ字国字論については、明治七年、西周が「洋字を以て国語を書するの論」(『明六雜誌』第一号)を発表したが、その後、しばらくブランクがあり、明治十八年には、矢田部良吉、外山正一らが「羅馬字会」を創立した。最盛期の明治二十年には、会員総数一万人をこえたという。この会は、明治十八年六月から二十五年十二月まで、ROMAJI ZASSHIを発行した。また、明治十六年七月には、かな文字運動の三団体が、有栖川宮威仁親王を会長に、吉原重俊、高崎正風を副会長として、「かなのくわい」を結成している。この会も羅馬字会と同様に、明治二十年から二十一年に最盛期をむかえている。山本正秀『近代文体発生の史的考察』岩波書店、一九六五、参照。なお、日本語に関する社会史的考察については、紀田順一郎『日本語大博物館』(ジャストシステム、一九九四)を参照。
- (41) 森岡健二『近代語の成立——明治期語彙編』明治書院、一九六九。
- (42) 加藤祐三『地球文明の場へ』(日本文明史第七巻)角川書店、一九九二年、一一二—一三頁。
- (43) 横山俊夫『節用集と日本文明』梅棹忠夫・石毛直道編『近代日本文明学』中央公論社、一九八四、八七頁。

- (44) 分類という思想については、坂本賢三『「分ける」こと「わかる」こと』(講談社、一九八二)、中尾佐助『分類の発想——思考のルールをつくる』(朝日新聞社、一九九〇)、池田清彦『分類という思想』(新潮社、一九九二)などを参照。
- (45) 紀田順一郎『知の職人たち／生涯を賭けた一冊』(紀田順一郎著作集第六巻) 三一書房、一九九七、三九頁。
- (46) 注(45) 前掲書、四九頁。
- (47) 石見尚『図書館の時代』論創社、一九八〇、三〇二頁。
- (48) 配架と知的世界像の関係については、F・ザクスル『シンボルの遺産』(松枝到訳、せりか書房、一九八〇) 第十章の、カッシラーとヴァールブルグ文庫の出会いに関するエピソードを参照。
- (49) 注(48) 前掲書、三一四―九頁。
- (50) 紀田順一郎「索引の文化史的背景について」『ビブリア』(天理図書館報) 一〇〇、一九九三、一三二―三三頁。
- (51) 紅野謙介『書物の近代——メディアの文学史』筑摩書房、一九九二、二二―二三頁。
- (52) 注(51) 前掲書、二三―二四頁。
- (53) 注(51) 前掲書、六一頁。